

往復書簡

今回からは小川源太氏（青森県、黄金崎農場）と当機構副理事長の高木勇樹との往復書簡です。

拝啓 高木 勇樹 様

新緑の候、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。この度はこのような機会を通して高木様と手紙のやり取りができることを嬉しく思うと共に、自分がどうして現在農業に携わっていて、これからどうしていききたいのかを再度考えるきっかけとなればと思います。

私の両親は農業の経験は全くなく、私もいざ就職が間近に迫るまでは農業に従事しようとは考えたこともありませんでした。「働く」とは思ったけどういうことなのだろう。子供の頃はお金を稼いで暮らすための「手段」だとしか思っていなかったのだが、自分がその世界に入ろうとした時に「それって楽しいの？ 幸せなの？」という疑問が湧いてきました。あまり好まない仕事をしながら、給料や休日をしつかりもらってそれを楽しむという方向もあつたかもしれない。しかし、やるならばやりたいことを思い切り出来て、自分にプライドをもてる「目的」としての仕事をしたいたい、農業の門を叩きました。そして、百姓が要求される多彩な能力の魅力や、日々感じる様々な幸福感にやはり農業に携わってよかつたと思える自分がいいます。「空腹は最高の調味料」というように、同じものであつても受け取る人の感じ方一つで全くの別物になつてしまうのと、幸せの感じ方は同じなのだと思います。

農業は国にとって最も重要な世間では叫ばれていながら、どうして一般的な就職先として選ばれにくく、いわゆる「優秀」と言われる人たちが入つてこないのだろうという疑問を、半分わかりながら、もその要素を消していけるようにしたい。これまで

「私」の仕事には満足を感じてきましたが、「公」の仕事にも携わっていきたく思います。一端である我々であつても、前例となることで世の中に影響を与えることは可能ですし、「類は友を呼ぶ」で仲間が集うことができると思つています。これからますます面白くなつていくであろう農業に期待を寄せるとともに、本業の生産以外にも多方面に学習していく必要性を感じています。将来の日本、子供や孫たちが飽食ではないにしても、飢えないようにという気持ちでいっばいです。我々の経験したことのない日本という社会のなかで奮闘してこられた高木様の人生観をお聞かせいただければ幸いです。

敬具

小川 源太（おがわ げんた）

一九八一年北海道札幌市生まれ
株式会社黄金崎農場 葉物野菜担当
弘前大学卒業後北海道の個人農家にて従業員として畑作の知識等を学んだ後、現農場に就職
北海道に劣らない素材をたくさん持つ青森の魅力
を全国に発信していきたい。
昨年一児の父親となつたが、育児と野菜の育苗・圃場管理を照らし合わせている日々。



上段：農場での結婚式

拜復 小川 源太様

六月九日関東甲信北陸の梅雨入りが発表されました。日本の梅雨は、四季に加え五季などと言われるほど長いのが特徴ですが、農作物にはとても大事です。

貴兄のお手紙を拝読し、今さらながら農業を見る物差しの変化を感じ、確実にいい方向に向かっていくと確信しました。

そのひとつは就職観です。私が就活をした五十年ほど前、就職先の中に「農業」はありませんでした。農家の子弟が就くものとの社会風潮があり、私もそれが当然と思い込んでいました。仮に「農業」を選択したら、親の反対と周囲の冷たい視線にさらされたでしょう。貴兄はプライドをもつて働ける目的が持てる職業として「農業」を選択され、ご両親も周囲（社会）もそれを当然視しています。

もうひとつは時代・社会の農業観です。私のおときは、経済は右肩上がりの絶好調、農村から都市への急速な人口移動、オリンピックも開催という時代背景の中、コスト高の国内農業不要論、つまり農業バッシングが国民意識の主流でした。

近年の農村、農業の疲弊、食料供給力衰退（農地、人などの経営資源のせい弱化）の顕在化により、強い農業、農業の産業化が叫ばれ、その方向での制度・システムも、既得権の壁に阻まれながら蝸牛の歩みですが、芽を出し始め、農家の子弟以外の方、他産業異業種の農業参入が珍しいものではなくなくなりました。当然農業界でも、農業を、経営として持続する産業として取り組んでこられた少数派の方

も、大手を振って活躍できるようになりました。

このように、私は農業を見る物差しの大きな変化を実感するのですが、貴兄には、国の基といわれる農業がなぜ「優秀」と言われる人の選択先にならないのかという疑問は残ったままです。

このなぜ（疑問）を深掘りし、貴兄の考える解決策を次回ぜひ提示していただければと思います。

「類は友を呼ぶ」核となる考えになり、その組織は必ずや既存組織を超える存在に発展する、また「公」に携わる際の自信にもなるかと確信するからです。

次回のお手紙を楽しみにしています。

敬具

平成二十四年六月吉日

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ
一九六六年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官

二〇〇二年 農林中金総合研究所理事長

二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任

二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

